様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：４３９０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３３２

研究課題名（和文）奴隷解放以前のアメリカ黒人文学へのイギリス社会運動の影響

研究課題名（英文）The Influence of British Social Movements over the American Black Literature before the Abolition

研究代表者
進藤　鈴子（SHINDO, Suzuko）

名古屋経済大学短期大学部・保育科・教授

研究者番号：８０４６１９１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　逃亡奴隷法の国会通過以来、多くの元奴隷達がイギリスに亡命した。両国には奴隷解放運動において協力体制ができあがっていた。イギリスは反奴隷制運動の歴史が長く、植民地での奴隷制度も30年も早く廃止している。『自由への逃亡1000マイル』、や『クローテル』などの作品を書いた逃亡奴隷達に対するイギリス反奴隷制運動の影響を検証した。一般白人の黒人アメリカ人に対する見解はホーソーンの『イギリスノート』を中心に検証した。
　アメリカの反奴隷制協会に比べ、イギリスの協会は組織がより強く大きかった、また、一般市民、政治家、貴族から成り立っていた。彼らは、逃亡奴隷を啓蒙し、寄付をし、彼らの物語を出版する援助をした。

研究成果の概要（英文）：Since the passage of the fugitive slave law, many ex-slaves crossed the Atlantic Ocean to seek refuge in England. It was certain that abolitionist groups of the two countries established appropriate collaborative relationships. England has a longer history of Abolitionists' movement and its colonial slavery was abolished more than thirty years earlier. I studied the influences of English abolitionist movement over the American fugitive slaves who wanted to contribute to the movement by writing literary works such as Running 1000 miles for Freedom and Clotel: or the President's Daughter. A general view of the black American by the white man was examined by reading mainly through Hawthorne's English Notebooks.
Compared with the American anti-slavery Society, English abolitionist society has a stronger and larger system, composed of common citizens, politicians and aristocrats. They helped the fugitive slaves by giving education, donations, and publishing their slave narratives.

研究分野：米文学

キーワード：奴隷文学　環大西洋奴隷貿易　19世紀アメリカ文学　イギリス反奴隷制運動

１．研究開始当初の背景

(1)奴隷解放以前のアメリカ黒人文学に関する研究は、散発的にはわずかにあるものの、高い関心が注がれるということはなかった。純文学としての価値が認められなかったことと、イデオロギー的要素の強さが現代の文学研究に適さなかったからかもしれない。しかし、文学には社会的な覚醒を促すという使命もある。合衆国憲法の中で「市民」としての権利を与えられなかった黒人民族の存在を、文学を通じて知らしめるという行為は、単に鑑賞のための文学を創造することよりも危険を誘発する行為であり、民族の存命をかける大仕掛けの行為である。19 世紀前半のアメリカ合衆国を覆っていたのは白人優越主義である。エドワード・サイード の警鐘を待つまでもなく、「語る力、あるいは語らせないようにする力こそ文化や帝国主義には重要な要素なのである」（『文化と帝国主義』）。19 世紀前半のアメリカ合衆国では、黒人たちが政治的な発言をすることは犯罪に等しかった。彼らに残された唯一の手段は自分たちの存在を「物語」(*narratives*)として表現し、主要民族の中にかき消された自身の民族の声を挙げることであった。黒人が「語る」ことは極めて政治的な行為なのであった。

そんな中、ジャクソン政権下、社会運動が盛んになり、1833 年にアメリカ反奴隷制協会が設立される。その頃から、継続的に奴隷体験記が書かれ始め、1850 年代には黒人による文学が登場する。初期段階では、アメリカ反奴隷制協会の機関誌に単発物として、あるいは連載物として作品が掲載されることが多く、読者層は僅かの例外を除けば、極めて薄いものであった。一方、白人小説家であるハリエット・ストウが描いた『アンクル・トムの小屋』(1852)という奴隷の物語は、本国でよりイギリスでセンセーションを巻き起こし、19 世紀を通じて聖書に次ぐベストセラーとなった。私がここで注目したのは、イギリス国民がアメリカ奴隷小説の潜在的な厚い読者層を形成していることであった。アメリカ国内では、自伝や中編小説が細々と出版され、組織内の販売ルートに乗るという微々たる文学的運動にすぎなかった。しかし、『アンクル・トムの小屋』以後、黒人作家の作品は一般読者を対象にイギリスで出版されることが多くなり、それがアメリカへと逆輸入されるようになってきていた。

(2)アメリカの奴隷制廃止論者たちが奴隷文学の基礎造りをしてきたことは事実であったが、読者層を拡大し、反奴隷制運動をより強力、かつ活発にすることによってアメリカ社会に変革を起こすところまではいかなかった。それは、アメリカの反奴隷制協会が組織として結束力に欠け、廃止論者達の輪を大きく広げることができなかったからである。その一方で、逃亡奴隷法(1850 年)の網から逃れようとする北部の逃亡奴隷達や、基礎的、技術的な教育を享受したい自由黒人達、また、様々な社会福祉世界大会に招待された元奴隷達が、次々とイギリスに渡っていた。1850 年以降はアメリカ黒人の出版物が最初にイギリスで出版されることが多くなってきていた。また、アメリカでは黒人が大学に入学することさえ困難であったのに対し、イギリス北部の有名大学には何人かのアメリカ黒人留学生の姿が見られた。アメリカの反奴隷制運動は、イギリスのそれとは、明らかに規模も資産も哲学も異なっているに違いないという推測はされた。

(3)イギリスの反奴隷制運動がどのような歴史を持つのか、彼らの元にやってきたアメリカの逃亡奴隷をどう扱い、どう待遇したのか、アメリカ本国の反奴隷制協会とはどのような連携を組んでいたのかの研究はほとんど未開の状態であった。実際には、社会改革運動はイギリスでははるかに盛んであり、1840 年に最初の反奴隷制世界大会が開催さ

れたのもイギリスはロンドンのエクセターホールであった。

(4)19 世紀に於ける反奴隷制運動は、大西洋の両岸で少なからず連動していたことは事実である。大西洋は奴隷貿易という負の遺産を継承する「場」であると同時に、黒人文学の救済という行為を通して、歴史の犯してきた、人類、特にアフリカ人に対する罪の贖罪へと向かう航路でもあったのである。その努力は、大西洋の東側、すなわち、イギリスでは 18 世紀後半から始められ、強い組織力を持ち、大西洋の西側のアメリカ反奴隷制運動に大きな影響を与えていたのである。

２．研究の目的

本研究に於いては、イギリスへ逃亡、亡命、留学したアメリカの奴隷や元奴隷、また自由黒人たちが、イギリスの一般市民あるいは反奴隷制協会、また、政治家や貴族たちからどのような協力や支援を受けることができたのか、また、イギリス反奴隷制協会はどのような運動を展開していたのかを、彼らがイギリスで出版した小説(特に、『自由への逃走 1000 マイル』と『クローテル』が中心)を分析することにより検証することが目的である。また、途中、研究の視野内に入ってきた事実として、同時代にイギリスに滞在したアメリカ古典作家のナサニエル・ホーソーンが当地で遭遇した自国の逃亡奴隷や自由黒人に対してどのような感慨を抱いていたのか、一般的なアメリカ人を代表する黒人観を考察することも目的とした。

もはや奴隷制度は存在しないイギリスであったが、反奴隷制協会の組織は大きく、強い団結力があり、常に、分裂しがちなアメリカ反奴隷制協会を援助し後援していた事実を明らかにする。また、アメリカでは奴隷制廃止の運動が社会運動にまで広がるのに時間がかかったのに対し、18 世紀後半という早い時期からイギリスではなぜ反奴隷制運動が発達したのか、その背景にあるイギリスの社会改革に対する民衆心理も明らかにする。

３．研究の方法

(1)第一次資料、及び第二次資料を図書館やインターネットを通じて収集する。また、イギリスでの反奴隷制運動の実態、及び、奴隷制度そのものについて実際に展示しているリバプールの「国際奴隷博物館」、また、それに次ぐ規模のキングストン・アポン・ハルにある「ウィルバーフォース・ハウス・ミュージアム」を訪問、観察し、資料を収集する。

(2)すべての資料を精読し、ノートにまとめる。テーマ別に文章化する。

(3)論文にまとめる。

(4)学会誌等、または著作として発表する。

４．研究成果

(1)最初に研究対象としたのは、ジョージア州のプランテーションから北部の自由州への逃亡に成功し、それから一年足らずで、逃亡奴隷法の成立により北部においてすら身分を危うくされたクラフト夫妻がさらに、イギリスへ亡命する物語『自由への逃走 1000 マイル』である。

二人は、妻の方が身分、性、人種を変えて白人農園主の扮装をし、同じく奴隷の夫はその妻の従者として従い、周りがすべて敵とも言える多くの白人旅行者に紛れて白人として振る舞い続ける一触即発の危険な逃亡に成功する。しかし、二人は逃亡奴隷法の国会通過により、さらに深い大西洋というボーダーを超えてイギリスに亡命せねばならなかった。彼らをイギリスで支援したのが、アメリカの反奴隷制協会と連携して運動をしていた人々であった。すなわち、社会運動に身を捧げる政治家や貴族、また一般女性を中心とする各地の反奴隷制協会の人々であった。協会の人々は彼らに反奴隷制を訴える講演

を各地で繰り広げさせたり、1851 年にロンドンで開催された世界初の万国博覧会では、反奴隷制運動家とクラフト夫妻が敢えて腕を組んで歩くなど、アメリカでは決して見ることのない示威行動を展開したりした。クラフト夫妻は、また、貴族であるバイロン夫人経営の農業学校に入学を許され、三年間の教育も受けている。その成果を、イギリスの奴隷解放運動協会の協力も得て、1860 年に逃亡記として出版している。イギリスの社会運動がアメリカの逃亡奴隷たちに与えた影響はこれまで看過されてきた事実であり、極めて意義深い検証になったと思う。

(2) 第二の研究対象は、一人のアメリカ政治家が見た逃亡奴隷を含む雑多な人種で構成されたイギリス社会の姿である。そもそも宗主国イギリスにはアメリカを植民地にし、奴隷制度を導入した責任があった。イギリス植民地ジェイムズタウンにアフリカ大陸からの奴隷たちが最初に陸揚げされたのは1619 年のことであった。その後、240 年余り続くアメリカの奴隷制度の礎を作ったのが、大英帝国なのである。

私は、宗主国にとっての奴隷貿易と奴隷制度の歴史と要因を知るため、2015 年夏イギリス、リバプールのアルバートドックにある「国際奴隷博物館」と「海洋古文献図書館」を訪問した。加えて、キングストン・アポン・ハルにある「ウィルバーフォース・ハウス・ミュージアム」にも足を伸ばした。不思議なことにアメリカには、このような奴隷制度について体系的に歴史や思想をまとめ上げた公開の大規模施設はない。奴隷貿易及び奴隷制度がどのような経緯で始まり、誰がどのように利益を獲得し、分配し、国家の資産としていったか、また、どのようなグループが、また、社会階層がその廃絶に尽くしたかが理解できた。非常に貴重な経験であった。

1850 年代、イギリスに留まった多くの逃亡奴隷がイギリス社会で反奴隷制運動を展開する中、1853 年からリバプール領事として赴任したのがアメリカ古典作家でもあるナサニエル・ホーソーンである。文学者ホーソーンが政治家として奴隷制度や人種問題、また当時イギリスが抱えていた様々な社会問題にどのような見解を持っていたのかを考察し、論考にまとめた。ホーソーンは自分が接触した黒人たちには極めて冷たい態度をとっている。イギリスにおけるホーソーンの黒人観を検証した例も少なく大きな意義があると思う。

(3) 最後の研究対象には、アフリカ系アメリカ人として初めて小説を書いたと言われるウィリアム・ウェルズ・ブラウンの作品『クローテル』(1853)を取り上げた。この論文は、一連の研究の集大成とも言えるものである。『クローテル』は、第三代アメリカ大統領トマス・ジェファソンの奴隷の愛人と二人の間に生まれた二人の娘の物語であると同時に、奴隷制度に抵抗し逃亡を続ける奴隷の物語でもある。

作者ブラウンが、作品の中で述べているように、イギリスは、奴隷貿易や奴隷制度の惨禍を自らの国家の繁栄のために利用し、半世紀も前に産業革命を成し遂げている。その一方で、植民地の奴隷制度は 30 年も早く廃止している。19 世紀を通じ、イギリス帝国では、「反奴隷制というイデオロギーが商業的、戦略的、精神的、道徳的なものを結合する主たる手段」となっているのである。イギリスは、反奴隷制運動という点においては、西半球で最初に共和国を作った合衆国よりも思想的に遙かに進歩的であったことを検証した。

イギリスでは、アメリカからの逃亡奴隷を、庶民から、政治家、貴族に至るまでが援助している。イギリスの社会運動がアメリカ奴隷制度に大きな影響を及ぼし、スタフォード宣言により、アメリカ奴隷制度の廃止を勧めるに至った。しかし、特にアメリカ南部がこれに反発し、結局、効を奏しなかった。

その一方、ブラウンは作品の中で何度もイギリスがアメリカの奴隷制度廃止のために尽力し、仲介することを要請している。最初のアメリカ黒人小説がイギリス社会の支援を受けて出版され、かつイギリス社会を動かそうとしたことは大きな意義があると思う。ただし、この論文は、体調不良のため完成に時間がかかり、現在投稿中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

進藤鈴子、『自由への 1,000 マイル』とイギリス反奴隷制運動、人文科学論集、査読有、94 号、2015、33-43

〔学会発表〕（計　1　件）

進藤鈴子、『自由への 1,000 マイル』とイギリス反奴隷制運動、日本ナサニエル・ホーソーン協会東海支部大会、2014 年 12 月 27 日、東海学園大学栄サテライト（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計　1　件）

進藤鈴子　他、開文社、ホーソーンの文学的遺産：ロマンスと歴史の変貌、2016、462 (379-402)

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
進藤　鈴子　（SHINDO, Suzuko）
名古屋経済大学短期大学部・保育科・教授
研究者番号：80461911

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）